



# 佐渡一毅 のドレッサージュトレーニング

2021年5月

vol.21

## ◆ 東京オリンピック代表選考競技

2021年4月から6月上旬にかけて行われた東京オリンピックの代表選考も終盤。6月に開催される日馬連主催の選考競技会の1週間前に、フランスで行われた CDIO5\* Compiègne に出場しました。私は Barolo と Ludwig の2頭で代表選考に臨んでいましたが、Barolo は怪我と疲労蓄積のリスクを考えて出場は控え、Ludwig のみを連れて行きました。また、ネーションズカップ（国別団体戦）には、北原広之選手と林伸伍選手とともにチームとして参加しました。

## ◆ CDIO5\* Compiègne (フランス)

### Ludwig

Ludwig は、5月上旬にオランダの CDI3\* Exloo に出場後、一度トリートメントと休養を入れて、徐々にビルドアップしてきましたが、競技会前のトレーニングでうまく状態を作ることができました。競技場での前日トレーニングも調子が良く、競技会でどのような騎乗をするべきかをうまくイメージすることができました。

初日のグランプリでは、競技本番10分前の練習馬場に入ると馬はややホットになり、脚に対して反抗を見せたり、身体を強張らせてスルーすることを拒むなどのスタリオンの悪癖を見せ始めましたが、この場面こそこれまでの競技で改善にトライし続けていたことだったので、焦らず冷静に馬をスルーセ、脚の前に馬を置いてうまく解決することができました。また、本馬場入場の際に駆歩発進で脚に反抗する様子を見せたので、それを良しとせず再度発進をやり直し、しっかりと扶助に従うことを確認して入場しました。この時点で今日のパッサージュからの駆歩発進は練習通りできると確信を持てましたが、この扶助操作の確認は今後も必ず必要だと感じました。本番では馬場は全体的にやや深く、場所によって深さが違つたり、グリップが良くなかったりと良いコンディションではなかったため、やや準備運動とは違った感覚でしたが、馬がよく頑張つて動いてくれました。また、入場からの停止も速歩区間での停止・後退もようやくうまくできてミスを防ぐことができました。駆歩区間では普段よりも前が低くなる傾向にあるように感じ、ジグザグや歩毎などミスをするかもしれない心配がありましたがうまく切り抜けてくれました。減点箇所となった右のピルエットでは、後肢がやや揃い気味になったところと、中央線にスムーズに戻れずリズムが崩れたところをミスとして取られ5~6点となりました。また、最後の中央線でのパッサージュでは、馬が後肢のステップを歪まそうとしていたことからスルーしている感覚が

足りないと感じ、脚のプレッシャーが強くなり後肢がアンイーブンになってしまいました。これにより2人のジャッジからは5点、5.5点と減点されてしまいました。結果としては69%と十分満足できる成績で、トータルすると前回の競技より良い演技ができたことは収穫でしたが、競技後に映像を見ると右ピルエット前までは70%を超えていたので、自分の詰めの甘さを感じました。

2日目は自由演技に出場しました。自由演技は、この馬にとっては規定演技よりも回りやすく、難しい移行も問題なく行えるので準備運動の時間を少し減らして調整しました。前日ミスのあったパッサージュでは、どれほどの脚扶助が必要かを確認しながらの騎乗に務めました。結果としては、やや馬を信用して脚の反応を求めていつもプレッシャーを強くしきないように気付きました。自由演技の経路の構成も手伝って、その点においてはうまく対処することができました。しかし毎回思いますが、自由演技の方がパッサージュの弾発をキープしやすいため、この感覚で規定演技のパッサージュもできなければなりません。前日ミスのあった右ピルエットについては、斜線上で行うものであつ



▲積み上げてきたものを出すことができた CDIO5\* Compiègne

たので心配はしていませんでした。斜線上では中央線上ほど明確に小さく回る必要はなく、人も自信を持っている運動の一つであったのでうまく行うことができました。全体としても大きなミスはなく、ややピアッフェは前進する課題が残りますが、トレーニングで積み上げて確認してきたことを演技で出すことができました。結果は76.155%の自己ベストスコアで、CDIO5\* という舞台で4位入賞することができました。

そして、何よりこの2日間の演技にはトレーナーの Imke もとても満足してくれました。普段から誰よりも親身になって指導してくれている Imke ですが、トレーニングでは妥協を許さず細部にわたってまで可能な限り完璧な状態を求められます。その要

求に応えるには、こちらも一切の妥協をせず人も馬もできるようになるまでトライし続けなければならぬ忍耐が必要でしたが、そのおかげでここまでの結果を出せるようになつきました。Imkeとともに積み上げてきたものが、このような大きな舞台でひとつの形にできたことは何よりも喜ばしいことでした。

オリンピック代表選考は、1週間後の日馬連主催選考競技会を経て決まります。万全の準備とケアをして、Barolo と Ludwig の2頭でベストを尽くさなければなりません。

#### ネーションズカップ

ネーションズカップとは国別のチーム戦のこと、馬場馬術競技ではヨーロッパ内でもそこまで多くはなく、日本がチームとして参戦することもほとんどありませんでした。参加したとしても多くの場合は「最下位」というイメージがありました。

今回は、最終成績は7チーム中6位で、ヨーロッパにあるイスを下した結果になりました。当初は11チームが参加予定でしたが、アメリカチームは馬ヘルペス陽性馬が出たため入厩前に棄権したため10チームでスタート、さらにデンマーク、オランダ、ロシアは失権・棄権が出て途中リタイアしたため、競技を終えることができたのは7チームという状況でした。出場10チーム中の6位と考えれば、良い結果で終えたと言えると思います。ポジティブにとらえすぎていることは承知していますが、これは3人馬で団体を組む東京オリンピックでも起こり得ることです。率直に言って、日本が団体入賞することは簡単ではないと感じていますが、全員がベストを尽くし、さらに今



▲76%という結果にチーム皆が喜んでくれた

回のように周りが脱落した場合には入賞の可能性もあることがわかりました。もちろん逆にそのようなトラブルが自分にも起きる可能性もあります。だからこそ上を目指すためには、普段から準備を怠らずベストを尽くして競技に臨むことがとても重要だと思いました。

今回のネーションズカップは、1日目：3人馬のグランプリの順位と、2日目：2人馬のグランプリスペシャル、1人馬のグランプリ自由演技の順位を合計して、その数字が小さい順に上位というルールでした。実は、北原選手とウラカンは跛行のリスクを背負って2日目のグランプリスペシャルに出場してくれました。オリンピック代表選考のために必要なのはグランプリの成績のみでした。しかし、ここで日本チームがリタイアすれば東京オリンピックに向けて良い印象を与えることはできなかつたでしょう。それを承知していたからこそ、北原選手はネーションズカップに参戦することを決めてくれました。このような勇気ある決断や国を背負って出場している责任感から来るチームスピリットのおかげで、今回の結果が生まれました。6位という入賞でも何でもない結果ですが、今後日本が強くなつていくためには、このような小さな積み重ねが今の馬場馬術チームには必要です。このような選手の集団であるチーム作りのためにも、今後もいろいろな形で携わつていければと思います。



▲ネーションズカップ参加でチームスピリットが向上 北原選手、林選手は私と Ludwig の表彰式まで残って見に来てくれた